



## Dupuytren拘縮に対するコラゲナーゼ注射の治療成績 —高度な屈曲拘縮例から見る課題—

田村篤史<sup>1)</sup>

1) 医療法人社団 研宣会 広瀬病院 リハビリテーション部

Key Word: 拘縮 手指 ハンドセラピー

### 【はじめに】

本邦では、Dupuytren拘縮に対するコラゲナーゼ注射治療が2015年に認可され、6年が経過した。従来の手術療法と比較し合併症が少ない点や、関節可動域の改善が良好な点などの報告が散見され、症例数も増加している。後療法のプロトコールやリハビリの適応基準などは施設によって差があるが、当院においてコラゲナーゼ注射治療を行った5例について、短期ではあるがその成績について報告し、リハビリ介入した高度な屈曲拘縮例を踏まえて今後の課題に触れる。なお、発表に対し十分な説明の上、症例の同意を得ている。

### 【対象・方法】

対象は2015年10月から2020年3月の期間で、Dupuytren拘縮に対してコラゲナーゼ注射療法を施行した5症例5指とした。症例は男性4名女性1名、平均年齢は65(59-72)歳、平均観察期間は5(5-24)週。罹患指は示指1指、環指1指、小指3指。Meyerding分類による重症度はGrade I 3例、Grade II 1例、Grade III 1例。罹患関節はMP関節3例、MP+PIP関節2例であった。注射は全例MP関節部を行い、注射施行24時間後に局所麻酔下で罹患指MP関節の伸展処置を行った。伸展処置後は全例伸展位での副子固定を行い、必要に応じて作業療法士が伸展保持スプリントを作成した。観察項目は、治療前と最終観察時のMP関節の屈曲・伸展角度、MP関節における有効率(伸展不足角度が5度以下になる率)、皮膚裂傷の有無、疼痛とした。

### 【結果】

注射療法を施行した5例の成績について、罹患指MP屈曲角度は全例制限なし。MP関節伸展不足角度は、治療前の平均が-26(-10~-60)度、治療後の平均が-3.2(0~-16)度と改善を認めた。MP関節における有効率は80%であり、1例を除いてMP関節伸展角度は0度となった。裂傷は5例中1例のみ見られたが、注射後2週で創治癒。疼痛は注射部または裂傷部に注射後2~5日の間で優位に見られたが、平均8週(2-16週)で全例消失した。

### 【症例供覧】

61歳男性、右利き。注射施行3-4年前から右小指の伸展制限を自覚。コラゲナーゼ注射治療を希望し当院受診。MP関節手掌部に硬結あり屈曲拘縮見られDupuytren拘縮と診断。仕事はデスクワーク、兼業農家。Meyerding分類Grade III(右環小指にnoduleあり屈曲拘縮は環指軽度、小指重度)。注射前の評価は右小指MP関節屈曲90度、伸展-60度。Hand20は27.5。Quick DASHは機能面4.5、仕事面0.0。右小指MP関節拘縮索にコラゲナーゼ注射施行し、24時間後に局所麻酔下で伸展処置施行。MP関節0°まで伸展処置可能であったが注射部に裂傷伴う。伸展処置直後から裂傷部保護のもと副子による伸展位固定を行い、注射後5日よりROM-ex開始。創治癒に伴い固定を夜間のみとし、伸展位保持スプリントを作成。夜間装具は8週まで装着。外来リハビリでのROM-ex、内在筋・外在筋ストレッチ、Six pack exの入念な実施と自己訓練指導を継続し、注射後9週で、MP関節屈曲90度、伸展-16度、Hand20は6.5。Quick DASHは機能面2.2、仕事面0.0。裂傷部の疼痛は消失し、手指自動屈曲も疼痛なく全範囲スムースに可能となる。

### 【考察】

諸家の報告では、コラゲナーゼ注射治療による、MP関節屈曲拘縮の良好な改善結果が散見され、当院でも総じて比較的良好な結果が得られていると考える。後療法の報告でも、早期からのハンドセラピー介入や、スプリントの作成、患者指導によって、良好な結果を得ていることが多い。しかし、供覧症例はMP伸展角度が-16度までの改善に留まった。松本らの報告では60度以上の屈曲拘縮があり、注射前から伸展角度の悪い症例は、注射後から徐々に悪化していく傾向にある、とされている。供覧症例のように、単指ではあるが屈曲拘縮が強度である場合、徐々に悪化する予後を鑑み、早期からの確な介入をする事の重要性を感じた。供覧症例に限っては、多忙もありリハビリ通院回数が週1回程度であった為、自己訓練のみでは伸展角度を十分に保持するに至らなかったとも考えられる。拘縮自覚から注射までが長かった事や、裂傷を伴った事などが後療法の遷延に関与したようにも感じた。今後の課題として、伸展制限の自覚から注射治療までの期間による後療法への影響の検討、裂傷を伴った例に対するプロトコールの検討、屈曲拘縮60度以下の例と60度以上の例とのハンドセラピー内容の差の検討などを含めて、長期的に分析していく。それを、本邦におけるコラゲナーゼ注射治療が再開した折の糧としていきたい。